インタビュー 篠田 文・アリスタゴラ・アドバイザーズ会長

新NISA活用の目的を明確に 自分のリスク許容度も把握を

富裕層向けの資産運用サービスなどを展開する独立系のコンサルティング・ファームのトップに、新NISAへの向き合い方について聞いた。

（聞き手＝安藤大介・編集部）

しのだ・たけし
1961年石川県生まれ。85年慶応義塾大学経済学部卒業。日系、外資系証券勤務を経て、2003年BNPパリバ証券株式・派生商品本部長。11年3月から現職。

―― 新NISA制度について、顧客の反応は？

■関心は非常に高い。富裕層から見たら1800万円は、さほど大きな額ではないはずだが、税金がかからないというのは、やはり投資のインセンティブになるのだと思う。旧NISAの時には見向きもしなかったのに、「使ってみようか」となっている。

―― 投資初心者も多く参入する。

■「つみたて投資枠」と「成長投資枠」に分かれているが、特に積立の「（長期で金融商品を購入し続ける）ドルコスト平均法」なら、多くの場合、得をする。ぜひやるべきだ。この対象が投資信託しか認められていないのは残念だ。本来、ドルコスト平均法はボラティリティーの高い商品に向いている。個別株が認められてもいい。

―― 初心者の注意点は？

■投資の目的がはっきりしないまま、何となく投資を始める人が多いが、ここが一番大切だ。長期でリターンを上げたいのか、株主優待が第一なのか、短期でもうけたいのか、企業を応援したいのか。これによって、投資の結果の評価が変わる。きちんと考えておかないと、結果を何で評価していいか分からず、成功したかどうかも分からない。

「もうからなくても（金融に関する知識を学ぶ）金融リテラシーが上がればいい」でもいい。まずは目的だ。

―― その他には？

■自分がどのくらい損に耐えられるのか、リスク許容度を知ることも重要だ。特に投資初心者は、一喜一憂しないこと。「自分は15%くらい損しても大丈夫」と思っていても、実際には10%でも耐えられないことが多い。何かしら自分で想定して始め、耐えられるかどうか知るのは、いい経験となる。

勝ちやすい長期投資

―― 著書などで、投資戦略の基本を「長期」「分散」「ほったらかし」と繰り返し訴えている。

■投資は長期が大原則だ。短期の投資は、プロの世界ではいろいろなやり方があり、個人がその領域で勝負しても勝てるはずがない。逆にプロになればなるほど長期投資はできない。ヘッジファンドでも半年とか四半期ごとに成果を確認される。個人は10年ほったらかしていても誰も文句を言わない。個人が一番勝ちやすいのは、実は長期投資だ。

―― 分散、ほったらかしは？

■運用の世界では、分散はリスクを減らし、リターンを減らさないということが理論として確立されている。気にすべきはポートフォリオの相関だ。数を増やしても、相関が高ければ分散ではない。

長期投資で一番ストレスを感じないのがほったらかしだ。コツはたくさん投資しすぎないこと。自分が資産の増減を気にならないような投資額を見つけるといい。

―― 富裕層の資産運用を長く見ている。訴えたいことは？

■第一は、だまされないことだ。うちの顧客でも億、数十億の単位でだまし取られる人が少なくない。詐欺がのさばっている状況だ。新しい金融商品の知識を知っていることが金融リテラシーではない。本業を持っている人なら、そんなところに時間を使わず、本業をやるべきで、まずはだまされないこと。当局は被害金額や人数が相当規模にならないと詐欺の取り締まりに乗り出さないが、そちらに注力した方が、はるかに「投資立国」への道へとつながると思う。

投資初心者でもそうした金融リテラシーを高めることは重要だ。新NISAでは、多くの人が手数料の安いオンライン証券を選ぶと思うが、店舗型の証券で口座を開き、金額が小さいうちからアドバイザーの良しあしを見抜く訓練をした方が、金融リテラシーは上がるのではないか。

「新しい資本主義実現会議」でNISAの拡充などの目標を示した岸田文雄首相（左、2022年11月28日）